

日本語会話文における比較表現の分析

Investigation of comparative form in Japanese Spoken Dialogue

友清睦子

Mutsuko TOMOKIYO

鈴木雅実

Masami SUZUKI

ATR 自動翻訳電話研究所

ATR Interpreting Telephony Research Laboratories

Abstract: The primary goal of this paper is a statistical investigation of the comparative form of Japanese Spoken Language using appropriable data from the ATR spoken language corpus. The analysis includes the choice of comparative phrase markers as well as more general comparative form phenomena. In addition the paper also examines the semantics of the Japanese comparative form and compares them with those of the English and French comparative forms. Also considered are the problems of describing the comparative form in a dictionary oriented J-E MT telephone conversation task. Finally some examples of description following the markers of the Japanese comparative form are shown.

1 はじめに

単一化に基づく文法の記述は、その語に固有の意味構造および論理の表現に有効性の高い手段であるといわれている。単一化演算が単調に行なわれるため、入れ子型の構造の深さを問題にしなれば、こまやかな記述が平均的に可能である。本報告では、日本語会話文に現れる比較文を取り扱う。まづ比較表現の実態を ATR コーパスにみ、会話における比較文の特徴をさぐる。次に日本語と他の言語語（英語／フランス語）とを対比することによって、日本語の比較文マーカの語彙分析を行なう。最後に音声言語日英翻訳実験システム (SL-TRANS) にむけた、HPSG による辞書記述例を示す。

2 ATR コーパスにみる比較表現

ここでいう比較表現は、2つ以上のもの、こと、動作、状態、程度などを何らかの語彙によってマークし、比較して述べる表現をさす。日本語では、比較概念を表出するマーカが品詞もふるまいもさまざまである。したがって、比較構造として基底構造を設けることが難しいが、2者比較では、格助詞「より」と相対名詞「方（ほう）」という非連続な2語で2つの文を結び付けた表現であると考えられる。また3者比較は「一番」など最上を表す副詞によるものが多い。

一方、英語／フランス語の場合は、基底構造として2つの文を

more..than/plus..que/less..than/moins..que/
as ..as/aussi..que

というやはり非連続な接続詞で結び付けた表現である。

表1（次ページ）は、ATR コーパスの中から比較の概念をもつ文を作ると思われる語および語列を抽出したものである。これらを比較文のマーカとして検討の対象とする。

2.1 比較表現語列リスト（部分）

調査対象は以下のとおりである。

調査対象：ATRDB

内容：英語／日本語の同一内容の電話会話で、テーマは国際会議についての問合わせ

ファイル数：181

発話数：6477

文数：11033

抽出マーカ数：44

比較表現文：1.6パーセント

2.2 コーパス分析

1) 「くらい」「以上」「以下」などが数をとまう時のように、マーカによって程度の差はあるが比較の概念がうすいものがある。

例：「いくくらい」「どのくらい」「3日以上」etc.

2)対応英語が抽出できないものがある。

例：「やはり」96.7%／「むしろ」75%／「ほど」48.4%

「やはり」「やっぱり」は現在の状況が話し手の観念内にある基準と差がないと話者が判断した時に使われる。[9]

そしてその基準は、一般的に過去の状態／他の状況

本来あるべき状態／外在する規則などである。

例1：タクシーで行くよりもやっぱり地下鉄で行った方が早い

んでしょうか（現状が本来の姿という認識が基準）

例2：国際会議に出席するのは初めてなんですけれども、

やっぱり海外から講演なさる方もおられるのですね

（話し手が想像した状態が基準）

例1はI supposeで訳されており、例2の場合は無視されている。

「やはり」「むしろ」「ほど」に共通しているのは、

何かしらの前提をもつ文をつくることである。

したがって英語側で現れてこないのは、前提をもつ文が必ずしも語彙レベルで表現されるのではないということである。

また、これらの語は話し手の状況認識の表出である

から会話文に特徴的に出現する語彙でもある。

「ほど」の場合は、日本語に語気緩和用法の「ほど」があり、

それが英語文の表面にあらわれないためである。

3)「方」が「より」をともなわない場合が61.9%あり、

会話文では何との比較であるかが話し手と聞き手の

間で了解済みの場合が多いことを示している。

4)「より」が「方」をともなわない場合が54.5%あり、

主語が省略されやすい日本語の特性によるものと思われが、この場合前会話に主語となるべき名詞句がある。

また「方」をともなわない「より」は取り立て助詞「も」

堤題助詞「は」をともなう場合が50%である。

5)

比較事項	日本語出現率	英語出現率
2者比較	68%	35.2%
3者以上比較	8%	4.9%
漠然とした比較	24%	59.8%

漠然とした比較の中には、「それほど～ない」や「くらい」などを含む。特に「それくらい」は話者の、確信のなさを出す場合に出てくるように思われる。したがって、対応英語として'That is all.'をとらない方がよいかもしれない。

6)

比較内容	日本語出現率	英語出現率
優等比較	50%	28.5%
劣等比較	3.9%	0%
同等比較	15.4%	7.7%
非等比較	3.8%	7.7%
その他	26.8%	56.2%

劣等比較は、「ほど～ない」「少しも～ない」

「以下」「未満」などによるものをさす。

非等比較は「とちがって」などをさし、「その他」は、「くらい」「ぐらい」などをさす。

表 1

No.	日本語列	頻度	英語表現	頻度
1	ほど	33	not too	1
			no so	1
			not so	1
			about	13
			such	1
			対応なし	16
2	やはり	24	probably	1
			I'm afraid	1
			still	1
			対応なし	22
3	方	13	better	6
			more ~ than	1
			best	1
			so	1
			more	1
			right	1
			対応なし	2
4	以上	13	more ~ than	2
			above	2
			any other ~	1
			any ~	1
			much ~ more	1
			for details	1
			so far details	1
			rather ~ than	1
			longer than	1
			対応なし	2
5	よりも	8	higher than	2
			cheeper than	1
			shorter than	1
			much larger ~ than	1
6	～より	7	more	2
			really	2
			対応なし	3
7	もっと	7	more	3
			earlier	2
			as much ~as	1
			better	1
8	より～方	5	rather ~ than	1
			more ~ than	1
			対応なし	3
			対応なし	2
9	やっぱり	4	too	1
			I suppose	1
			対応なし	2
10	むしろ	4	actually	1
			対応なし	3
11	かえって～方	3	better	3
12	よりは	2	not ~ but	1
			nearer to	1
13	よりも～方	2	more ~	1
			対応なし	1
14	よりは～方	1	対応なし	1

3 日本語の比較表現 - 基本的な形態とその機能または意味

比較表現文は次のようなマーカーで示され、その意味または機能をみると以下のとおりである。

- 1) 比較対象指示：方（ほう）
例：汽車の方が便利です
(Trains are more convenient.)
(C'est le train qui est plus pratique.)
- 2) 比較範囲規定：以上／以下／未満／あまり／ほど
例：5才以下の子どもは無料です
(Children under five years of age are free.)
(Pour les enfants en dessous de cinq ans, c'est gratuit.)
それをみた以上信じざるをえない
(Since I have seen it, I cannot help believing it.)
(Je ne peux pas m'empêcher d'y croire, puisque je l'ai vu.)
- 3) 比較の基準：より／よりは／よりも／と同様に／とは逆に／と（に）比べれば／年上／年下
例：彼の方が私より若い
(He is younger than me.)
(Il est plus jeune que moi.)
車で行く方がバスで行くより安いです
(Going by car is cheaper than going by bus.)
(Prendre un taxi est moins cher que prendre l'autobus.)
- 4) 強意：より
例：より広い部屋はありませんか
(Do you have a bigger room?)
(Avez-vous une chambre plus grande?)
- 5) 反対結果の積極的断定：かえって
例：タクシーに乗ったら電車よりかえって時間がかかった
(I went by taxi but it was slower than taking the train.)
(Je suis allé en taxi, mais ça m'a pris plus de temps qu'en train.)
- 6) 消極的断定：むしろ
例：映画よりむしろ家にいてテレビを見たほうがいい
(I prefer watching television at home to going to see a movie.)
(Il vaut mieux regarder la télé à la maison que d'aller au cinéma.)
- 7) 程度：もっと／さらに／くらい／ぐらい／ほど／もう少し／よほど／はるかに／ずっと
例：この辞書はそれよりずっといいです
(This dictionary is much better than that one.)
(Ce dictionnaire est beaucoup mieux que celui-là.)

会議についてもっと詳しいことが知りたいのですが
(I would like to know more about the conference.)
(Je voudrais avoir des renseignements plus précis sur la conférence.)

- 8) 同等：同じだ／と同様だ／やっぱり／やはり
例：彼はテニスが上手ですが弟さんもやっぱり上手です
(He is good at tennis, and his younger brother is also good at tennis.)
(Il joue bien au tennis et son frère aussi.)
- 9) 最高級：一番／最も／最高／最低／最大／最古／最短／最適／最中／最善／最良／最悪／最新／最盛／最新／最強／最近
例：この建物は京都で一番古い
(This building is the oldest in Kyoto.)
(C'est l'édifice le plus ancien à Kyoto.)
日本人にとって最も恐い天災は地震です
(The natural calamity which terrifies the Japanese most is an earth tremor.)
(La calamité naturelle qui épouvante le plus les japonais, ce sont les tremblements de terre.)
- 10) 予想：案外／わりあい／けっこう
例：試験は案外やさしかった
(The examination was easier than I had expected.)
(L'examen était plus facile que je pensais.)
- 11) 例示：くらい／ぐらい／ほど
例：山田さんくらい英語ができれば楽しいでしょう
(It must be fun to be able to speak English as well as Mr. Yamada.)
(Cela doit être amusant de pouvoir parler l'anglais aussi bien que Mr. Yamada.)
35才くらいの人
(about 35 year old person)
(personne d'environ 35 ans)

4 辞書記述に際しての考察点

4.1 基本的な構造

格助詞「より」は名詞句／動詞句をうけて、その基本的な構造は以下のとおりである。

N- 「より」例：新幹線より／先生より

V- 「より」例：マイクで呼び出すより

飛行機でいくより

名詞「方」は「の」を介して名詞句および、「の」を介さないで動詞句をうける。

N- 「の方」例：先生の方（が）

V- 「方」例：新幹線でいく方（が）

動詞句をうける場合は、ギャップのない連体修飾構造となる。

例：飛行機でいくより新幹線でいく方が速い

4.2 述部の意味

「より」をともなう比較表現においては、述部をなす語彙に極性がある時(＊)、その語本来の意味が成立しなくなる現象がみられる。

ex.1

- a. 花子は太郎より若い
- b. この切手よりあの切手がほしい

ex.a は、この文の後ろに「でもふたりとも60才をくだるまい」と続けることができ、花子は必ずしも若くなくともよい。

この現象は、英語でもフランス語でも同様で、たとえば Hanako est plus jeune que Tarou. Mais Je crois qu'ils ont plus que 60 ans.

と続けることができ、意味論上問題はない。

一方 ex.1.b では、「この切手ならいいよ」と続けることができるが、「あの切手がほしい」ことにはかわりがない。これは、形容詞いわゆる属性形容詞「若い」と感情形容詞「ほしい」の差である。しかしながら、属性形容詞でありながら ex.b と同様の現象がみられるものもある。

- c. 花子は太郎より若々しい
- d. Hanako looks like younger than Tarou.
- e. Hanako a l'air d'être plus jeune que Tarou.

ここでは「太郎より」がなくても、花子が「若々しい」ことが予想できる。これは「若々しい」に段階性/主観性/多様性があるからであると思われる。

したがって、比較表現文の解析のためには、述部になんらかの意味マーカが必要である。形容詞の場合は、感情形容詞と属性形容詞を区別するために、

[garu + / -][mo + / -]

属性形容詞の極性の有無を区別するために、

[polar + / -][gradable + / -]

の素性をあたえる。

以下に形容詞「若い」と「ほしい」の辞書記述例を示す。

若い
(<!m syn semf> ==
[[garu -][mo -][polar +][gradable -]])

ほしい
(<!m syn semf> ==
[[garu +][mo -][polar -][gradable -]])

若々しい
(<!m syn semf> ==
[[garu -][mo -][polar -][gradable +]])

4.3 「より」の意味表現

ex1 の例文比較により、「より」格が文中にある時とない時で文意が異なる場合があるということがいえるわけである。ここから「より」の機能をみちびくと、「より」は述部の意味の成立条件であり、「比較において」を暗示し、比較の基準となるものをマークしているといえる。「より」の辞書記述例とそれによる解析結果を示す。

(<!m !synhead coh sem> ==

[[CRITERIA ?noun-sem]])

例：わたしは先生より若い

```
[[reln 若い -1]
 [aspt stat]
 [CRITERIA [[parm !X01[]]
             [restr [[reln 先生 -1]
                     [entity !X01]]]]]
 [exper [[label *speaker*]]]
```

＊極性に関する判断手段として Hamamoto[1] が、more or less をつけて意味が成立するかどうかのテストを提唱している。

4.4 「方」の意味表現

「方」(ほう)は独立で使われることのない語であり、常になんらかの修飾をうけ、被修飾の形態は3種である。

ex2.

- a. 太郎の方が花子より若い (N-「の」-[方])
- b. 送るより手渡すほうがいい (V-[方])
- c. この方があれより新しい (ATT-[方])

ex2.a. の例では、「の方」の部分をはづしても、読みを変えずに(＊)意味が成立する。b. の例では「方」を準体助詞「の」に変えることができ、c. では代名詞「これ」に変えることができる。したがって「方」は本来の意味(事物のむかうところ/方向)から機能語へ転化し、2者比較の中で選ぶとる方を指示するといえるだろう。

それがなくとも話者間の了解が可能な時、「より」格をともなわない。「方(ほう)」の意味表現例を以下に示す。

例：送るより手渡すほうがいい

```
[[reln いい -1]
 [aspt stat]
 [obje [[parm !x02[[parm !x01[]]
                    [restr [[reln MARKED]
                            [entity !x01]
                            [IDEN ほう -CHOICE]]]]]]]
 [restr [[reln 外の関係の連体修飾]
         [arg-1 !X02]
         [arg-2 [[reln 手渡す -1]
                  [aspt unr1]
                  [agen []]
                  [recp []]
                  [obje []]]]]]]]]]
```

[CRITERIA [[reln 送る -1]
[aspt unr1]
[agen []]
[recp []]
[obje []]]]

- (*) ただし、主語が「が」格でマークされ「方」をと
もなわない時、2 者比較と 3 者以上比較の読みがでてくる。
d. 木村君が早川君より早くちです

([Among their colleagues] Kimura is the
quickest speaker, followed by Hayakawa.)
(C'est Kimura qui parle le plus vite [de ses
colleagues], suivi par Hayakawa.)

- e. 木村君のほうが早川君より早くちです。
hspace10mm 木村君は早川君より早くちです
(It's Kimura who speaks most quickly
in his colleagues.)
(C'est Kimura qui parle plus vite que Hayakawa.)

d. においては、「大勢の中で木村君より早くちなのは
早川君」であるという読みも成立し、木村君と早川君 2 人
だけを比較しているのではない。これは、「が」でマーク
された時、その直前の名詞を焦点とするからこうした読み
がでてくるものと思われる。

4.5 対極否定の表現

比較表現の 2 者比較はつねに表現のうら側に、否定命
題を含むといわれる。

ex2.a

花子は太郎より背が高い → 太郎は花子の背丈にとどいて
いない

この側面は日 / 英 / 仏共通であるが、否定命題部分を
表層に出して表現しようとする時、日本語と英語／フラン
ス語の間でくいちがいがみられる。

- a. 花子は太郎より背が高い
(Hanako is taller than Tarou.)
(Hanako est plus grande que Tarou.)
b. 太郎は花子より背が低い
(Tarou is shorter than Hanako.)
(Tarou est plus petit que Hanako.)
c.*太郎は花子より背が高くない
(Tarou isn't taller than hanako.)
(Tarou n'est pas plus petit que Hanako.)
d. 太郎は花子より背が高くない
(Tarou isn't taller than Hanako.)
(Tarou n'est pas plus petit que Hanako.)

b. は述語をかえた肯定文であり、c. は日本語としてお
さまりが悪く、d. は「高い」が主題化されている。したがっ
て、日本語比較文には単純な否定文がないということにな
る。

一方英語／フランス語では、Hanako is taller than Hanako.
Tarou isn't taller than Hanako. Hanako est plus grande
que Tarou. Tarou n'est pas plus grand que Hanako.

が、ニュアンスの差はあるが意味を変えないで成立し
する。英語の NOT は直前の BE 動詞のみを否定し、フラ
ンス語の NE-PAS は間ではさむ語のみを否定する。しかし
日本語の否定辞「ない」は、否定のコーパスが動く。

4.6 程度の副詞と共起する時

3.1.7) であげた程度の副詞は修飾語との間で共起制限
がある。

ex3.

- a. 太陽は地球よりよほど大きい
b.* 太陽は地球よりとても大きい
c. 花子は太郎よりよほど背が高い
d.* 花子は太郎よりとても背が高い
e. 全くすばらしい

ex3..b.c. のおさまりの悪さは、b. は「とても」が既知
あるいは未来事項には使われないということ、d. は「と
ても」が主観性がつよい表現であるという語用論に起因する。
[9]

一方、英語 / フランス語の方でも、その国語固有の共
起制限があるといわれている。以下の共起は一般的に非文
になるだろう。

しかし日本語では ex3.e. は可能である。

*absolutely generous/*absolutely diligent/*utterly old/

completely superb/*completely magnificent/*very great/

quite great/*very terrific/*very taller(higher,bigger)/
completely delicious/*tres magnific/*tres meilleur/

この共起制限は各言語 (日本語／英語／仏語 etc.) に固
有の問題であるから、ソース言語の辞書記述だけでカバー
できないことがらでもある。また、命題内容が未知である
か既知であるかなどは、意味ネットワークなどを使った他
の推論機構を用意しなければ解析不可能である。ここでは、
単に「よほど」と「とても」を格名で分けた辞書記述例を
示す。

よほど

(< !m syn head coh sem > ==
[[DEGREE ?self-sem]])

とても

(< !m syn head coh sem > ==
[[EMPHASIS ?self-sem]])

4.7 前提をもつ表現

比較表現が前提をもつのは、否定文の時と有標の語による表現の場合である。

ex4.

- a. 花子は太郎ほどのつぽではない
- b. 花子は太郎より若い
- c. Hanako is not so tall as Tarou.
- d. Hanako n'est pas aussi grande que Tarou.

ex4.a. では「ほど～ない」が否定表現で有標であるから、花子も太郎も標準よりは背が高いことを予想させるが、b. では2人の年齢に対する含意はない。この現象は、c.d. にみるように日本語／英語／フランス語共通である。したがって、変換以降の問題として、否定文であることがわかっていればよいことになる。したがって、「ほど」の辞書は以下のように記述する。

```
<![m prag prsp-term> ==  
  [[mode ほど]  
   [scope ?scope]  
   [presupposition ?self-sem]]]
```

一方、形容詞の有標性については、Ota[3]に詳述されており、対立のある語のうち、代表として用いられる語のほうが無標であるとされている。すなわち、short-tall/low-high/narrow-wideにおいてtall/high/wideが無標である。したがって、

- e. John is as old as Mary.
- f. John is as young as Mary.
- g. 花子は太郎より年をとっている
- h. Hanako est plus jeune que Tarou.
- i. Hanako est plus agee que Tarou.
- j. Hanako est plus vieille que Tarou.

e. ではジョンもマリも年をとっている保証はないが、f. ではジョンもマリも若い。日本語でもb.の例で花子は必ずしも若いとは限らないがg. では太郎が相当の年齢であることが、前提であろう。h.i. ではともにHanakoが若いまたは年をとっている保証はないが、j. ではHanakoもTarouもかなりの年齢であることが前提である。したがって、日本語では「広さ」「高さ」は「狭さ」「低さ」より代表的であり、文中で無標であり前提をもたない文となる。日本語に「年上」「年とった」「としよりだ」「年老いた」といふ回しがあるように、英語にもフランス語にもシノニムがあり(*)、各語彙について、どれが無標かが問題になると思われる。

*old/aged/elder/senil/superannuate/venerable/
patriarchal
age/vieux/aîné/vieilli

4.8 数の限界表現

「以上」「以下」「未満」「あまり」などの接辞は、数または数プラス類別辞をうけて名詞句を構成するが、数の表示は日本語と英語でずれてくる可能性がある。

ex5.

- a. 15才以上 ($15 \leq$)
- b. 15名以下 ($15 \geq$) no more than
- c. 15才未満 ($14 \geq$)
- d. more than ($>$)
- e. not more than ($<$)
- f. as..as ($\leq$) ただし含意として比較される2者は標準より上
- g. no more than ($\leq$)

こうした表現のずれは、特にc.の場合や否定をとまなう時を考慮して、辞書記述に工夫が必要となる。以下の例は、日本語の表層の数が英語側でどう表層上現れるかを考慮した語用論的記述例である。

未満

```
<![m prag suffix> == [[reln LESS]  
  [mode miman]  
  [object ?ncat]]]
```

4.9 範囲の表現

「..から..まで」をとまなう数量的な範囲の表現は、類別辞をとまなう時、その類別辞がなにを計算する辞であるかを辞書記述で明示する必要がある。

ex6.

- a. 25才から35才までの人
(people between the age of 25 and 35)
(les personnes entre 25 et 35 ans)
- b. 5名以上10名まで
(from 5 to 10 people)
(de 5 a 10 personnes)
- c. 10から100まで
(from 10 to 100)
(de 10 a 100)

4.10 イディオムのなもの

「以上」「方」などを含む表現において、慣用化しているものがあり、その英語／フランス語側表現が画一的ではない場合がある。

ex.7.

- a. これ以上：もうこれ以上議論しても無駄だ
(It's no use arguing any farther.)
(ce n'est pas la peine de discuter davantage.)
もうこれ以上働けない
(I can't work any longer.)
(Je ne peux pas travailler davantage.)
これ以上はかれの名誉にかかわることですから
言えません
(I can tell you any more because it concerns
his honor.)
(Je ne peux pas en dire davantage, parce que
cela concerne son honneur.)
- b. それ以上：それ以上は言わないでください
(Don't say any farther, please.)
(N'en dites pas davantage, je vous prie.)
それ以上スピードをだすな
(Don't go any faster)
(Ne conduis pas plus vite.)
- c. 予想以上に：試験は予想以上に難しかった
(The examination was much harder than I [had]
expected.)
(L'examen était plus difficile que je pensais.)
予想以下の成績でした
(I received a worse mark than I had expected.)
(J'ai eu des notes plus mauvaises que je pensais.)もつ。
- d. 方がいい：急ぐ方がいい
(We had better hurry up.)
(Il vaut mieux y aller vite.)
急いだ方がいい
その方がいい
(it's better.)
(Cela vaut mieux.)

日本語では、「これ」「それ」がダイクシス指示詞で
あり、「以上」の内容は明らかに示されない。しかし述
部からある程度の予測が可能である。一方英語側では、「こ
れ以上」「それ以上」の部分が具体的である。例えば、

- e.*I can't work any farther.
f. Je ne peux pas travailler davantage.
は、おさまりの悪い文であるし、
g. It's no use arguing any longer.
h. Ce n'est pas la peine de discuter davantage.
ex7.g. では意味が少々変わってくる。つまり ex7.a.b.
の例からいえることは、述部がある程度その語用論によって、
分類されていることが要求されるということである。
しかしフランス語では davantage の語義の広さである程度
カバーできるようである。
また、ex6.c. の問題は、名詞表現と動詞表現についてである。
i.*The examination was much harder than my
expectation.

i. は文法的に問題がないにもかかわらず、話し言葉のなか
では少し変な表現である。

日本語の表現が「予想以上に」のときに、I expected の
名詞化表現 (nominalization) が不可であれば、変換部で日
本語 - 日本語変換することになるだろう。フランス語の
場合は慣用的に 'prevu' または 'je pensais' となるので、
やはり日本語 - 日本語変換の対象となる。

ex6.d.e. は軽い忠告や勧告を意味する。d. は e. よりも
立言内容に一般性があるといわれるが、このニュアンスを
英語側に反映することは、辞書記述のレベルでは、非常に
むづかしいと思われる。また日本語では主語がほとんど顕
示しないが、他者の行動についての話者自身の判断を示す
ことが多い[13]。したがって、主語が3人称の時は明示さ
れ、1人称のときは、文末の終助詞などをともなう。一方
英語では主語を明示する必要があるため、解析結果に示さ
れていなければならない。フランス語では非人称主語をた
てて単文になるか、主語を明示して複文構造になるかのい
づれかであるため、やはり解析結果に主語の情報が必要で
ある。

4.11 最上級の副詞 / 形容名詞

3.1.9) でみたように3者以上の中からひとつを選びと
る最上級の表現は日本語では副詞と形容名詞でマークされ
る。「～で一番」「～の中で最も」「最～」の形態を
もつ。

- ex.8 a. 一番はやい列車
(the first train)
(le premier train)
b. 一番南の建物

ex.8.a.b. の問題は、「一番」が形容詞も名詞も修飾す
ることであり、英語やフランス語ではこうした現象はない。
副詞のかかり先として名詞を許容すると、解析木が増大す
るのはよく知られている。

- c. 一番はやく起きた人
(person who got up first)
(la personne qui s'est levée la première)

「一番」は順序／序列の起点をあらわすが、EX7.a.c.
の問題は被修飾語によって「はやい」を訳し分けなければ
ならないことである。

- d. 最もはやく起きた人
(person who got up earliest)
(la personne qui s'est levée le plus tôt)

「最も」は時間／量／程度などが最高であることを意
味するが、ex7.c.d. の問題は「最も」と「一番」という修
飾語の副詞によって述部の意味が決定されるので、その訳
語選択のために、副詞をみななければならないということ
である。

未解決事項が多いが、「一番」と「最も」の辞書記述例を示す。

「一番」

```
(<!m sem> == [[reln SUPERLATIVE]
               [SET ?SLOC]
               [FIRST ?SUB-SEM]])
```

「最も」

```
(<!m sem> == [[reln SUPERLATIVE]
               [SET ?SLOC]
               [MOST ?SUJ-SEM]])
```

4.12 同等比較と非等比較

「と同じ」「とちがって」「と比べて」の表現は、述部自体が比較マーカである。その意味で他の形態とことなる。

ex8. a. かれは私と同じ背丈だ
(He is as tall as I am.)
(Il est aussi grand que moi.)
b. この子はよその子とどこかちがっている
(This children is somehow different from other chil-
dren.)
(Cet enfant a quelque chose different des autres en-
fants.)

英語／フランス語では同等比較は as ~ as / aussi ~ que の比較マーカをもっているが、非等比較はもっていない。これは、比較表現が本来類似度をのべるにたいして、「ちがっている」の訳語はそうではないからである。日本語の方が比較表現の幅が広いことを意味している。

むすび

1. 比較表現はマーカのあるものと、文意として比較の概念を含むがマーカの無いものがある。後者については、今後の課題である。
2. マーカとしてあげたものは、語や語列であり、品詞としては格助詞、名詞、副詞、接辞など多様であり、言語的ふるまいを異にする。一応、節型比較構造と句型比較構造にわけられるが、意味表現のパラダイムには、ばらつきがでる。
3. 英語／フランス語にくらべて、2者比較、3者比較などのあり方がシステマティックではなく、語彙依存性がつよい。
4. 生成においては、義務的省略や副詞と述語部分の共起制限などで日本語の側からは見えない問題がある。
5. 今後の課題として否定辞などとの文中における共起関係を表現することをこころみたい。

謝辞

この研究の機会をあたえてくださり、貴重な御助言をいただいた ATR 自動翻訳電話研究所 樽松 明社長、森元 暹室長に感謝致します。また言語データベースを利用させていただいた江原 暉将主幹研究員（現 NHK 放送技術研究所）、および討論に参加してくれたデータ処理研究室／言語処理研究室の研究員諸氏に感謝致します。

参考文献

- [1] 形容詞比較級の成立条件について、'90, 日本言語学会ハンドアウト
- [2] Yagi, T, 程度表現と比較表現, '87, 大修館書店
- [3] Ota, A, 否定の意味, '83, 大修館書店
- [4] Nagata, M, SL-TRANS における日本語文法の概要, '90, TR-1-00156, ATR 自動翻訳電話研究所
- [5] Okada, N, 副詞と挿入句, '85, 大修館書店
- [6] Makino, S & Tsutui, M, A Dictionary of Basic Japanese Grammar, '86, The Japan Times, Ltd.
- [7] Maynard, S, K, Japanese Grammar and Communication strategies, '90, The Japan Times, Ltd.
- [8] Kuwae, K, Manual de Japonais vol1, 2, '85, L'asiatheque
- [9] Morita, Y, 基礎日本語 1, 2, 3, '77, '84, 角川書店
- [10] Larreya, P, Enonces performatifs Presupposition, '79, Universite Nathan Informaation formation
- [11] Ariyoshi, J, Adverbial Elements in Middle Constructions, '91, 日本言語学会ハンドアウト
- [12] Recanati, F, Les enonces performatifs, '79, Les editions de Minuit
- [13] Mizutani, N, 話しことばの文法, '85, くろしお出版